

大城ひかるのベトナム

通信

-19-

シンチャオ
(Xin chào)
おきなわ



朝昼夜の3回、学生の登校時に校舎入り口で行われるあいさつ運動（筆者撮影）

私の勤務するKAIZEN YOSHIDA SCHOOLには、「KAIZEN姿勢7か条」というがあります。日本人にとっては職場の常識のようなものですが、ベトナム人には特に実践が難しい7つを選び、日本で働くときに困らない

ための心構え・行動指針として教えています。

その第一は「自分からあいさつする」です。「こんなことか?」と思われるでしょう。日本では出社したときは「おはようございます」と言い、次は「お疲れ様です」に変わります。他部署に入るときは「失礼します」と言い、退社するときは「お先に失礼します」と声をかけます。あいさつは社会生活の基本と、日本では考えられています。

ところが、ベトナムにはこのような習慣がありません。朝黙って事務所に入って来て、黙って帰っていきます。退社するのか、外出なのか、こ

日本と異なる越のあいさつ

ちらは分かりません。私が所属する教育部門の同僚は、日本で生活した人が多く、学生にも指導する立場ですから日本と同じようにあいさつをしますが、別部署の人はこうはいきません。あいさつしたところで、何の反応もないのが日常茶飯事です。学生を見ていると、隣の席の消しゴムを勝手に使うので、そのたび聞いて使おう」と伝えていきます。

だからと言って、ベトナム人があいさつをしないわけではないと、たいいてい「はん食べましたか」と聞かれます。これがベトナム流のあいさつで、「食べましたよ」と答えて終わる場合がほとんど

ですが、中には「何を食べましたか」と聞いてくる人もいます。たずねた本人は私の回答には関心を示さないで、これがあいさつだと分からないうちは、興味本位でプライベートに触れられた不愉快さを感じていました。

海外に長い同僚によると、中国にもこのようなあいさつがあるようですが、韓国ドラマでもよく出てきます。日本でも休憩に食事から戻った時、デスクで仕事をしている仲間がいたら「食事済んだ?」などと声をかけることがありますから、人間関係を円滑にする声かけの一つなのでしょう。

あいさつと言えば、日本の「お疲れ様です」を絶賛する米国人の話聞いたことがあります。彼によると、社内では何れも会うと英語では表現できる言葉がなくなってしまう気まずくなるようですが、日本語の「お疲れ様です」はいつでも、どこでも、誰にでも使え「外国人にとってこんな便利な言葉はない」ということでした。

日本には朝昼晩、食事の前後、帰宅時、寝るときなど、数多くのあいさつがあり、学生は最初覚えるのに苦労します。しかも「こんにちは」「こんばんは」は会社ではなく、主に生活の場で使うなど使用場面も考えなければなりません。沖縄に帰った時、「またね」「じゃあね」ではなく、「さよなら」と言った私に友人が変な顔をしたのですが、これも学校でしか使われなくなってしまう言葉かもしれません。日本人同士でもしばしば意見が分かれるあいさつ。意外と奥が深いようです。